

近江の企業

創

への情熱

▷ 26

「無限の力を持つている、古く新しい魔法の素材だ」
炭を生かした環境商品を製造・販売している大津市上田中野町の「大木工芸」の大木武彦社長(39)は「炭にほれこんだ」と言う。

紀元前から燃料として利用されてきた炭。最近では、無数の細かい穴で有害物質などを吸着する性質から、多方面で活用できると脚光を浴びており、多様な商品が出回っている。

そんな中、大木工芸では今年1月、竹炭を利用したマスクや洗剤、シャンプーなどの生活用品を「C-ION(シーイオン)」のブランド名で売り出した。竹は木よりも成長が早く、コストも安い。木炭よりも多孔質で、洗剤などにはミネラル成分を含むホタテ貝の殻などを混合させており、肌によさしい、と好評だ。

炭化させた家庭ごみや流木などを骨にかわで接着した「エコ植木鉢」も昨年11月、川崎製鉄(現JFEスチール)、電源開

環境商品製造販売会社 大木工芸

無限の力持つ竹炭に着目

発と共同開発し、今年夏をめどに商品化する計画だ。「2〜3年で水に溶けて分解され、最後は土に戻るので環境にやさしい。家庭ごみを再利用できるの

も魅力だ」と言う。
大木社長は岡山県加茂川町で生まれ育った。幼い頃、野山で遊んだ体験が、自然や環境への意識を育み、今に生きているという。岡山市内の県立高校を卒業後、京都市内の塗料販売店に勤め、70年にマネキン

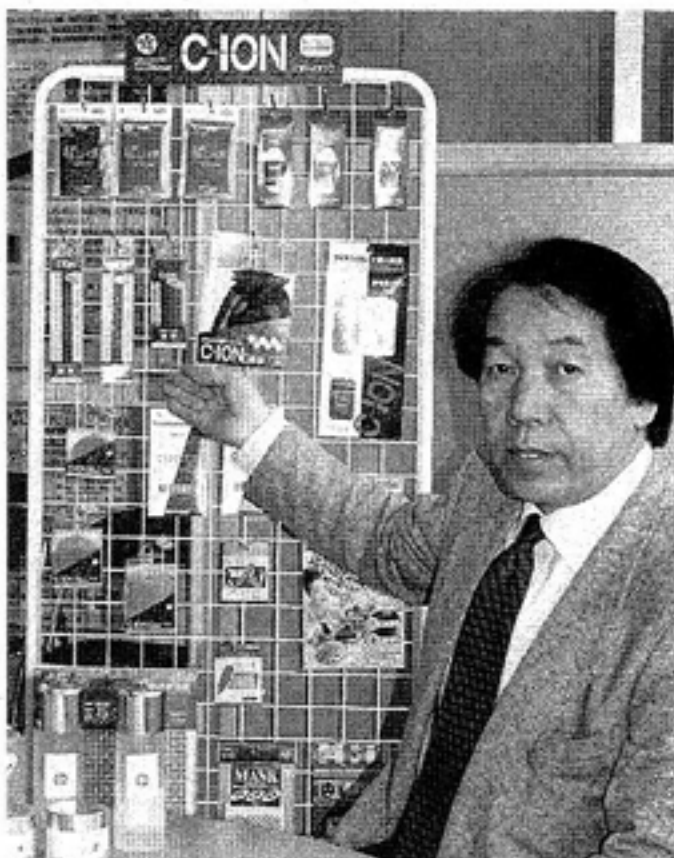
を製造・販売する会社として大木工芸を創設した。絵を描くことが好きで、絵画をガラスに張り付けて保存する技術を開発。さらに、フィルムや紙に印刷した絵を、接着剤を施した板などに転写する「常温転写トランスアート」の技術を生み出した。

炭の活用は、トランスアートから思い立った。接着剤として使う樹脂は、有害物質が水などに溶け出す恐れがあった。これを炭化させれば問題が解決するのではないか。そう考え、98年、大阪大学工学部の竹本喜一(30)教授(現)を顧問に、龍谷大学理工学部研究室を設け、炭

琵琶湖で取った藻

エキスを吸着させ

キノコ栽培を研究



竹炭を使った商品を説明する大木武彦社長＝京都市南区の大木工芸京都工場

竹炭の生活用品



大木工芸が売り出す「C-ION」の生活用品は約25種類。「最近では、冷蔵庫などに入れて腐敗臭を吸着するシート「フレッシュキーパー」(300円)が売れています」と大木社長。このほか、シャンプーなどのヘアケア用品、竹炭マドラー、かかと用パック、脂取り紙なども好評とい

ろ。詳細は大木工芸(077・549・1309)のホームページ(<http://www.ohki-techno.com>)で。